

The Gallery voice

NO-59

編集・発行 / 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄南風原町神里 373 TEL / FAX(098)888-6117 / 2014.9.13
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

植民地—NON

高良憲義

米軍の沖縄占領は戦後から来年で70年、まだ続いている。金網や基地はその象徴で今回はその金網を使って作品を作った。

金網は基地として、アメリカの沖縄支配として人が意識しようがしまいが島の人をずっと呪縛してきた。こんなに自由じゃないのとあっけらかんに笑ったとしても、やはり縛られている。自分の家、自分の土地として法務局にもちゃんと登記されていると言っても、普天間の大型ヘリCH53Dの墜落事故のように、大学の学長も県知事も、たとえ人から恐れられ泣く子も黙る日本警察・・・であっても決して敷地に立ち入る事が出来ない。人々はただの無力のかかし。時には下っぱのクソがきの兵士が「ゲラーレ！ゲラーレ！」と県警でも追い散らかしてしまうのだ。沖縄の存在、不条理が突然姿を現わす瞬間である。

ふだんは黙っている存在はフェンスとなり、にぶく光りながら島をくねくねと縦横に広がっていく。島の人が近づかないよう70年島の人を突き離してきた。いたるところに「立入り禁止」の板を吊るし、島の人をずっと疎外してきた。わかるけど、私にも息抜きが必要、生きる空間が必要、基地だ、基地だとあまり言わないでねと感じさせる人もいる。基地には花がない、暗い文明の長い支配で心が傷つき、深く疲れ果てているのかも知れない。しゃがみ込む人、反抗し逆に激しく生きる人、あっけらかんにケラケラ笑う人、どちらからも私は何かを得る。

私の作品は一人では出来ない、無数の人、島全体が集まってくる。負であっても島全体のエネルギーが作品を作らず。島の歴史、島の処分、島の併合、支配されいやしめられ貶しめられて

きた人々の声、源泉からの声、源泉からの音も時々、静かに聞こえてくる。言葉を殺され何一つうまく言えなかった人、どもりの声、おどおどしながら言葉や生を生きてきた人、時代、理不尽な世界、卑しめられ社会的拷問を受けながら貧しく細々と生きた時代、島の人々は最近ようやく周りが見えるようになってきた。



「NON - 1」 ミクストメディア 2014年 183x185cm

復帰40年、戦後70年を経てようやく遠く鶏の夜明けの声が聞こえるようになってきた。島の唄、島の踊り価値のないものは何もない。

草一本、石ころ一つ大きな価値を持つ。宇宙広しといえど草一本どの惑星にもない。

宇宙時代この地球が、島が宇宙に青々と大きく浮かぶ島の家。島ブロック、島の石垣、かわら家、がじゅまる、バナナ、シーサー、島の人、イキガ、イナグ、オジーオーバー売店、ウグアンジュ、墓、海、海の色、珊瑚、さんご礁、魚、台風、ざん（ジュゴン）シャコ貝、イラブー。島が宇宙でヒヤサッサ、地球で不思議な色、不思議な宝ものとして輝く。すべてが神秘、存在すべてが花、すべてが宇宙や源泉からのプレゼント。残念なのは私の作品が否定的だということ。作品ではなく表現していること、しかし否定を通し新しい価値の創造を願っている。



「森の声」 ミクストメディア 1995年 185x90cm

作品とは基地とは何だろう。それは私し単独では成り立たない。基地はそれ自体が地獄変、暗示複雑で多様なものと結びついている。イクサ、第二次大戦、家族、アーリントン、摩文仁、敗戦ボツダム、ミズリー降伏、サンフランシス

コ条約、広島、長崎、沖縄、イラク、ベトナム、ソシミ枯葉剤、奇形、毒ガス、ヒージャーアメリカ合衆国兵士の婦女子暴行、宮森小学校、高江、辺野古、森、海、サンゴ、ジュゴン、県知事の破壊許可、痴事、狂気、辺野古地獄変、海上保安庁職員のアメリカへのモテナシ、沖縄人への執拗な暴行、大サービス、銀座キャバクラ嬢顔負けのキャンプシュワープ、浜辺、兵士、水泳、太陽が一杯の若いアラン・ドロン達が海上保安庁職員のパカを見て笑っている。暴力許可の指揮官、民主主義にツバを吐く日本政府。植民地弁務官気取りの総領事、基地はその針金のように、毒クラゲの触肢のように、あらゆるものからんでいる。

歴史は今ここ、過去ではない。辺野古、戦場的良心的カメラマンのシャッター、新聞社の記者たちの苦悩、基地、金網、作品全てはつながっている。残念なのは私には能力がないこと。しかしシムサー誰かがやってくれる、作品はつながり、一部断片、LOVE。

(たから けんぎ / 美術家)



「兇区」(部分) ミクストメディア 2014年 93.5x71.8cm

呪縛する見えない「フェンス」

上間 かな恵

今から3年前の2011年11月、私が勤務する佐喜眞美術館を囲む米軍普天間基地のフェンスの一部が消えた。フェンスと支柱の建て替えのためだが、古いフェンスが約30m撤去され、何もない状態が1週間続いた。想像していただけるだろうか。何もないということは、基地の中に自由に出入り出来る空間が、いきなり30m現れたのだ。業者は丸めたままの新しいフェンスをポンポンと置いたままで、2、3日間工事は進められず誰もいない。米兵もこない。館長はじめ美術館スタッフは交代で基地の中を散策した。基地の中から美術館を見上げ、市民運動場まで歩いてみた。写真を何枚も撮った。ソテツの実を何個か植えた。基地の中にあつた黄色い立派なクロトンを一枝折って、家に持ち帰り挿し木した。いまそのクロトンは、大きな葉をつけて60cmほどの高さに成長している。その間、米兵やセキュリティーは誰もこなかった。自分でも驚いたのは、普段フェンスで仕切られているところから基地内に足を踏み入れようとしたとき、一瞬、緊張で身構えてしまったことだ。70年近く沖縄の土地を分断し続けているフェンスは、知らないうちに私の身体をも縛っていたのである。

高良憲義作品の「NON」シリーズは、そのフェンスが白いキャンバスを覆う。網目に隙間なく並ぶカラフルな「NON」の文字。リボンやテープ、横断幕で彩られた辺野古や普天間基地野嵩ゲートのフェンスのようだ。1968年に高良氏は仲間と「現代美術研究会」を立ち上げ、グループ「NON」を結成し、野外展やハプニング活動を行っている。1960年代の主流だったフランス現代思想からの「NON」は、絶対権力からの精神の自立と自由の象徴を表すことばとして、あの時代に共有され承認されて、人々の心に響いていたのだろう。しかし、なぜ2014年のい

まも、高良氏はフェンスに「NO」ではなく「NON」と刻印するのか。46年前の「NON」と全く変わらない沖縄の構造的差別状況が、他の言葉を選ぶ余地を与えなかったのか。60年代の匂いが立ち上る「NON」は、いまでも高良氏自身を呪縛し続けているのか。消えたフェンスの先に突然開かれた空間へ私が足を踏み入れたときに、身体に表面化した米軍基地の呪縛のように。

私はもうひとつのシリーズ「兇区」の方に高良氏の叫びを感じる。叫び声を激しいストロークで何度も黒く塗りつぶしたような画面に妖しく発光する紫の「兇区」。「すべてが神秘、存在すべてが花、すべてが宇宙や源泉からのプレゼント」という高良氏は、沖縄の島々の草一本、石ころ一つに宇宙の神秘を見出し、島に在るものすべてを愛してやまない。それを日米両国がなんの価値のないもののように傲慢に踏み潰して痛みすら感じないような状況は、発狂しかねないほどの怒りを覚える。そんな沖縄の叫び声も、国家暴力によって何度も何十年も無視され押さえ込まされ、ヤマトには届かない。それでも沖縄は叫ぶことをやめず、「兇区」へ怒りの飛沫をまき散らしながら厚く黒いマグマを育てている。

高良氏自ら「残念なのは私の作品が否定的だということ」と言わざるを得ない厳しい作品に囲まれたギャラリー空間を歩き回りながら、仏語の「NON」でもなく塗りつぶされた言葉でもない1作品のタイトルを発見し、思わず笑ってしまった。「とーうふぬかしーちぶる(協定)」。この声こそ、高良氏のIdentity。基地の中から持ち出したひと枝のクロトンのようだと思った。この声を自分に深く挿し木して、その根で私の身体を縛り続ける見えないフェンスを縛り潰したい。

(うえま かなえ / 佐喜眞美術館学芸員)

KENGI TAKARA



高良憲義について

高良憲義氏の個展は画廊沖縄では2012年以來の個展である。その時の通年企画「依存-Independent」において「ぼくは戦争難民」のテーマで臨んでいただいた。そのテーマで展示された作品「ナンバープレート」(1967年作/沖縄県立博物館・美術館収蔵)はおよそ半世紀近い時間を経た現在にあって、人々の薄れ行く歴史の記憶を呼び戻す作品であった。リアルでストレートな内容の作品は強い印象をもたらした。27年の米軍統治を経て、復帰(日本化)40年余の現在、その作品は今日の沖縄の社会状況と重なり、人々の眼前に立ちはだかり、心を揺さぶり、観る者に問いかけ、静かに現在と戦後間もない時代を往還しながら語りかけてきた。琉球・沖縄の美術史で語り続けられる作品であろう。

さて、今企画展「状況--Identity」に高良氏はどのようなテーマ臨んでくるのか興味津々であった。真夏の午後、小祿のアトリエを訪ね作品を見せていただいた。軍事基地の象徴とも言えるフェンスが大きな板パネルに貼り付けられ、「NON」の印文字が赤、青、黄色、紫、黒の色で画面一杯に広がっている。

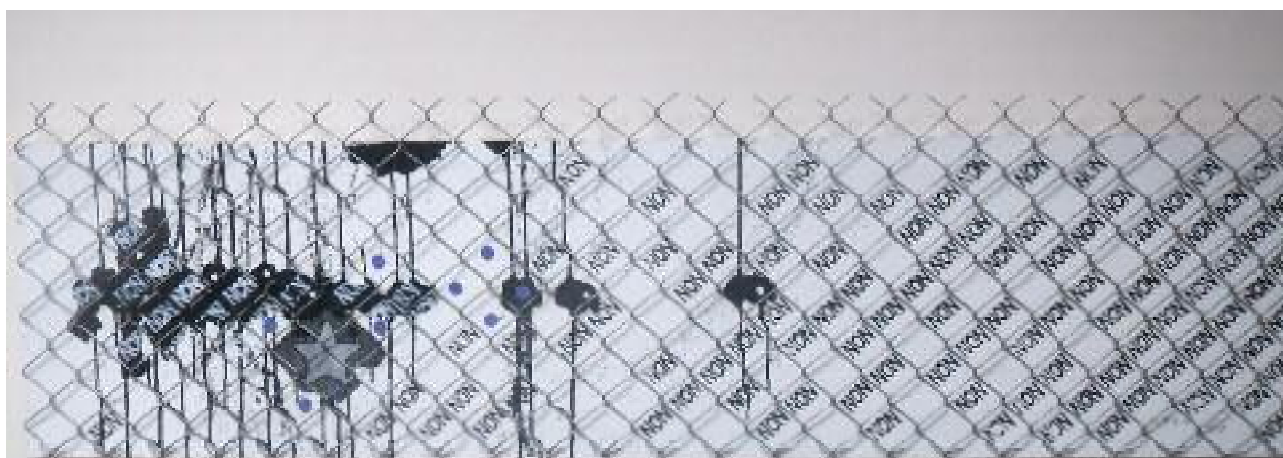
まるで大勢の人々の「なーならん!、ダメ!、ノー!、いやだ!、止めろ!」という叫び声が聞こえてくるようだ。今回のタイトルを伺ったら「植民地」だ、「NON」だと間をおくことなく返ってきた。GV紙本号(1項)で高良氏は「復帰40年、戦後70年を経てようやく遠く鶏の夜明けの音が聞こえるようになってきた。」と述べ、氏が吐露するように、時代の状況が大きくなると共に変化し、沖縄の人々の悲鳴が聞こえ、状況に抗い、未来を憂う大人たちの姿が目の前に広がっている。「構造的差別」「自己決定権」「日米軍事植民地」「建白書」「オール沖縄」「琉球独立」と思潮が流れ、11月の県知事選を前に「イデオロギーからアイデンティティへ」の音が聞こえる昨今である。辺野古および普天間基地を巡る日本政府の傲慢な政治的弾圧に対して、高良氏は「この辺野古基地建設問題は政治問題であるが、大きな社会問題である。若い表現者はそれは『政治的である』として、その本質から逃げている気がする。やはり私は表現者はその問題から避けて通れない」と述べている。私のような団塊世代が高校生の頃の1960年代は、「日本復帰運動」が島ぐるみで広がり、学校現場の先生方は熱かった。現在の学校現場はどうだろうか?。大学生はもちろん、高校生も復帰運動に参加した時代であった。「状況と美術」現在の沖縄で大いに問われるところである。

30代、40代の若い世代は言う「生まれたときから米軍基地はあったし・・・」「現在美術・コンテンポラリーアートは地域の人々の生活と共有してゆくものだ・・・現実的でフレンドリーだ」昨今の公的助成に寄りかかる「地域活性化型プログラムアート」は盛んであるが、プロテスト(抗議性)を帯びた内容のアート展や作品があまり見られない。今展の高良作品を現在の若い美術家はどのように捉えるだろうか?。いわゆる「うざい」という言葉で絡め取るのだろうか、いや決してそうではないはずである。居座り続ける軍事基地の金網は若い人々には日常に麻痺して「見ていて見えてないのか・・・」75歳の美術家の瑞々しいポップでデーブな作品群は問いかける。(上原誠勇/画廊主)

<参考作品>



「NON - 辺野古」 ミクストメディア 2014年 185x183cm



「惨」 ミクストメディア 2014年 55x183cm